

公方

五味文彦

法螺を吹く

藤原良章

赤口

西岡芳文

永宣旨

永村眞

後家とやもめ

久留島典子

宛米

神田千里

そふ・ソモ

網野善彦

網野善彦・笠松宏至・勝俣鎮夫・佐藤進一編

ことばの文化史

[中世3]

久留島典子(くるしま・のりこ) 1955年生
東京大学史料編纂所助手
神田千里(かんだ・ちさと) 1949年生
高知大学人文学部助教授
網野善彦(あみの・よしひこ) 1928年生
神奈川大学短期大学部教授

ことばの文化史 中世 3

1989年 4 月 7 日 初版第 1 刷発行

編 者 網野善彦・笠松宏至
勝俣鎮夫・佐藤進一

発行者 下中 弘

発行所 株式会社平凡社

東京都千代田区三番町5番地
郵便番号 102 振替 東京 8-29639
電話 東京 (03)-265-0461 [編集]
(03)-265-0455 [営業]

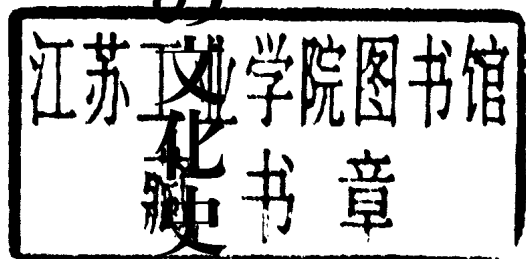
印刷・製本 中央精版印刷株式会社

©代表 Yoshihiko Amino 1989 Printed in Japan

ISBN4-582-40313-1

乱丁・落丁本のお取替えは直接読者サービス係まで
お送り下さい(送料は小社で負担します)

ことばの



中世 3

網野善彦・笠松宏至
勝俣鎮夫・佐藤進一 編

平凡社

刊行のことば

名は実の寶というけれど、推移変易する実体に、その名としてのことばがつねに忠実に対応して、それ自身を変えてゆくとは限らないし、その反対に、実体は変らなくとも、それを表わすことばの方が流動転変して、かつてのことばが消滅することとも亦、その例枚挙にいとまないところである。

歴史研究の史料として文字が大きな比重を占める以上、史料の中のことばを注意深く検討して、史料の作成者および同時代の読者が理解したのと同じの解釈に達することが、文字史料利用の第一の前提でなければならないが、ことばの史的検証と

いうこの自明の前提が見過ごされる傾きはなかったであろうか。

本シリーズは、以上の認識の上に立って、ことばの史的検証によって、中世という時代と社会の理解に資すべき手がかりを得たいという願いをもって生まれた。ここに収める数編、ことばの選択、立論の視点、行文の手法のすべてが各執筆者の自由任されている。本冊が本シリーズを更に発展させることができれば幸いである。

一九八九年四月

網野善彦

笠松宏至

勝俣鎮夫

佐藤進一

目次◎ことばの文化史「中世3」

刊行のことば 3

公方 五味文彦 9

無用の物ども 10

公方の語 16

鎌倉中 22

いかがわしき公方 30

法螺を吹く 藤原良章 41

はじめに 42

諸天善神歡喜せん 45

罪障消滅 52

仏敵降伏 60

法螺貝と護摩の灰 68

結言 76

赤口 西岡芳文 87

はじめに 88

一 中世の聖なる公休日 89

二 口の物忌

- 1 「赤口」の休日 89
2 「赤口」の思想 101

109

- 1 陰陽師の占い 109
2 「口舌」の示すもの 117

まとめ

132

永宣旨

永村 眞

137

後家とやもめ

久留島典子

165

宛米

神田千里

197

一 はじめに

198

二 宛米と石高

200

三 自作地の宛米

205

四 宛米と株

208

五 宛米と庄屋

212

六 宛米と下作

222

七 宛米と領主

227

そふ・ソモ

網野善彦

237

公^く
方^{ほう}

五味文彦

無用の物ども

東国に下り、末法の世にふさわしい仏教を求めて専修念仏に徹した親鸞がなくなつたのは弘長二年（一二六二）のこと。その六年後、蒙古の使者が日本にやってくる、また蝦夷では叛乱がおきた。

文永五年の比、東に俘囚をこり、西には蒙古よりせめつかひつきぬ。

こう記したのは日蓮であるが、これこそ末法の時代に外へと開かれていった日本の動きの一つの帰結と言えよう。十一世紀の中葉、末法思想の流行とともに古代国

家の維持してきた価値観の揺らぎから、人々の関心は広く外部世界に向けられるにいたった。一つは博多にやってくる宋商を通じて大陸の世界に、もう一つは俘囚の長の叛乱によって東方の世界に。その関心はやがて文物の輸入と、貿易品としての金の需要において一つに結びつき、日宋貿易の隆盛、国土の津軽外ヶ浜への拡大をもたらしたのであった。鎌倉新仏教はそうしたなかで生み出されてきたと言えよう。ところが、内部世界を拡大させ、外部世界との交流を深めていった結果は、逆に、外部世界からの侵入を蒙ることにもなった。⁽¹⁾

その危機を逸早く察知したのが日蓮であったのも偶然ではなからう。天下第一の持経者を称する日蓮は、東国の野に育っただけに幕府の政治的現実を直視していた。もはや内なる価値の揺らぎとともにあった末法的価値観では事態を把握できないとみた。末法思想を否定し、新たな時代における仏教を主張したのである。

では末法を越えた新たな時代とは何か。この点を極めて鋭敏な感性でとらえたのが『徒然草』の兼好である。末の世を嘆き、末法思想を信ずる兼好ではあったが、

その末の世がもはやかつての末の世ではないことを痛感してもいたらしい。次に掲げる『徒然草』百二十段はそのことをよく物語っているのではなからうか。

唐の物は、葉の外はみななくとも事欠くまじ。書どもは、この国に多く広まりぬれば、書きも写してん。唐土舟の、たやすからぬ道に、無用の物どものみ取り積みて、所狭く渡しもて来る、いと愚かなり。遠き物を宝とせず、とも、また得がたき貨を貴まず、とも、文にも待るとかや。

ここには貴重な文物を心待ちにしていた末法の時代の文人の態度はもはや見出されない。次から次へと押し寄せてくる唐物の氾濫を、「無用の物ども」とみなし、切つて捨てている。しかしそれはさておきこの現象は、二度の元寇によって侵入が終わったのではなく、一層の侵入に出あったことを実によく物語っているよう。

事実、文永の役後の間もない建治三年（一二七七）には、大宰府からの報として、

宋朝が滅ばされて、今春渡宋の商船が交易もならず帰朝したと伝えてきたが、その一方で『元史』は、この年にも日本の商人が金をもってきて交易し、銭を持ち帰ったと記している。また韓国新安沖で引き揚げられた、元朝「至治三年」（一三二三）の年号の木簡を有する沈没船が、大量の銭・陶磁器・紫檀材などの交易品を積んでいたことも見逃せない。

こうした銭を始めとする「無用の物ども」の侵入をみた兼好は、さらに当時の社会にひろがる価値の多元化、分裂を見出さざるをえなかった。

百二十段で唐からの「無用の物ども」の侵入を嘆いたその次の段では、馬・牛・犬などの有用の家畜をあげた後、「その外の鳥獸、すべて用なきものなり」と記し、鳥獸を飼うことを戒めている。さらに次の百二十二段でも、最初は人の習うべきことどもをあげて、有用の能の何たるかを示したものの、ついには無用の能も提示せざるをえなかった。そしてかつての「幽玄の道」の能が今の世の政治にはもはや無用となってしまったと述べている。

ところでこのように兼好が一連の「無用の物ども」について語るきっかけとなつたのは、百十八段で鯉の話に触れ、それとの対比によつて鎌倉の鯉に言及したからである。

鎌倉の海に鯉と云ふ魚は、かの境ひにはさうなきものにて、この比もてなすものなり。

と始まる百十九段は、後世、初鯉を好んで食べた江戸の町人を大変怒らせた話である。その内容は、この頃、鎌倉では鯉を大いにもてはやすようになったという年寄りの話を記し、「かやうの物も、世の末になれば、上さままでも入り立つわざにこそ侍れ」と述べたもので、そこから百二十段の唐物の話へと移ってくる。この排列が興味深い。無用のものの発生源として、鎌倉と唐とが並んであげられているのである。

兼好の信ずる王朝の価値を揺るがせ、価値の分裂を導いたのは、実にこの鎌倉のものと唐のものであったと、兼好は気づいていたのであろう。だからそれらを無用と切って捨てねばならなかったと考える。つまり鎌倉の鰹こそは、東国の鎌倉に生まれた新しい価値を象徴し、唐物の方は外部世界から侵入してくる新しい価値であったわけである。

内部世界を拡大させ、外部世界と交渉をもった日本は、こうして内部と外部とからの新しい価値によって、価値の分裂・多元化を余儀なくされたと言えよう。したがってこの二つの価値のあり方を探る必要がでてくるが、ここでは内部からの価値の創出、即ち鎌倉に生まれた価値と、その体系の成長について触れてみたい。